

緘黙傾向を改善し、活発に学習する子の育成

—— Y・K児の生活単元での指導 ——

橋 本 浩 之

1 対象児のプロフィール

生徒名 Y・K(女) 昭和45年4月13日生(中学部2年) IQ38(WISC)

本校小学部より入学し現在に至る

(1) 一般的特性

- ・たいへん恥ずかしがり屋で、人前で話すことが苦手である。発言を求められると、極度に緊張し、涙さえ浮かべてしまうこともある。また、とても負けず嫌いな面もある。
- ・小さい子や能力的に低位な友達の世話がとても好きで、うまい。
- ・知的能力を要する学習は苦手だが、音楽と作業学習には、絶対の自信を持っている。

(2) 問題点と研究に取り上げた理由

本児に、「生きて働く力」を育成する上での問題点として、特に次の点があげられる。

- ・大勢の人の前に出ると、赤面し、何もしゃべれない。
- ・あまり親しくない人と、自然に話をすることができない。

本児は、知的能力が低いにもかかわらず、比較的高い生活能力を持っている。また働くことを全くいとわず、友だちの世話もたいへんよくしてくれる。つまり、本児は、学校教育の中では、とても「良い子」であり、多くの長所を持っている。しかし、上記の問題点のために、意思伝達能力に欠け、集団参加が出来ず、結局、長所を発揮することができない。そこで、本児の将来の社会参加を可能とするため、まず上記の問題点を改善すべく、研究に取り組んだ。

2 個人目標の設定と研究方法

(1) 個人目標の設定

本年度当初、本児の個人目標を次のように設定した。

『人前でも自然に話ができる』

そして、個人目標達成のための取り組みは、当然Y・K児の学校生活の全ての場面で行なうが、研究との取り組みは、主として生活単元学習の中で重点的に行なうことにした。

(2) 研究の方法

本児が人前で話ができないのは、極度な緊張のためである。そこで、まず、緊張場面での本児の緊張を取り除いてやることに重点を置いた。そして、そのような配慮の下、本児に、「人前でも自然に話できた」という成功経験を数多く持たせるようにした。そうすることで、本児が自信を持ち、個人目標実現につながるのではないか、という仮説である。この仮説の下に、本児の緊張を取

り除くための手だてを構じることを方法として、研究に取り組んだ。

3 授業の構成と指導の手だて

(1) 授業の構成

個人目標を達成するために、4月当初、まず、授業の舞台となる学級作りから取り組んだ。次に示すのが、その時、目指した学級像である。

- ・友だちの失敗を笑ったりしない学級
- ・元気よく、自分の意見をどんどん言える学級

そして、学級作りと同時に、毎時間の授業をおよそ、次のような流れで展開していった。

- ① 雰囲気盛り上げ、発言しやすいムードを作る。〔導入〕
- ② 緊張を取り除いた上で、自由に発言させる。〔展開〕
- ③ がんばって発言したことをほめ、次時への意欲を高める。〔まとめ〕

もちろん、授業の中には、本児の緊張を取り除くための様々な手だて（後述参照）を織り込んでいったことは、言うまでもない。

また、本児が、人前で話をするような特別な機会（行事等）が近づくと、その日に向けて、実際の場面を想定し、主に、生活単元学習の中で、反復練習を試みた。そして、本番の発表には、絶対の自信を持って臨めるように配慮した。

さらに、学校内の先生へのお使い（伝言・届け物等）も、『あまり親しくない人と話をする場面』として、有効に利用した。



生活単元学習での学習場面

(2) 指導の手だて

授業を実践する中で、本児の緊張を取り除き、抵抗なく話ができるようにするために、次のような手だてを考えた。

- ① 授業中、発言できた時には、充分ほめてやり、お使いに行ってくれた時には、必ず報告させ、「ありがとう」と答えてやる。
- ② 本児の発表したことが、まちがっていても、強く否定せず、一応認めてから訂正する。
- ③ 教師の質問に対して、本児が挙手していない時には、指名しないようにする。
- ④ 多くの友達や先生の前で発表する場面では、できるだけ本児の得意なものを発表させる。
- ⑤ ペアを組むような場合では、本児がリーダーシップをとれる相手と組ませる。

これらの手だては、授業全体を通して、常に施していくものであるが、時の経過と共に、徐々に減らしていきたいと考える。手だてなしに、少しでも人前で普通に話ができるようになった時、こ

の研究で取り上げた問題点が、除去・改善に向かっていると考えたい。

4 指導実践例

(1) お使い指導

4月当初、本児が自然に話せる教師は、以前の担任や同学部の教師に限られていた。比較的かかわりの薄い他学部の教師とは、緊張のため、話すことが出来なかった。従って、他学部の教室へのお使い（伝言、届け物）は、頼まれても拒否することが多かった。

そこで、本児が、本校のより多くの教師と、自然に話せるようにするために、本児に、他学部の教室への届け物等、担任からのお使いをさせることにした。その際、「これを持って来ました」等の短い伝言を付け加え、必ず話さなければならないようにした。

① 事例Ⅰ —— 「世話好き」な性格を利用して ——

K児に、小学部のA先生へのお使いを頼み、本児には、「Yちゃん、Kちゃんを連れて行ってあげてね」と、K児の補助を頼む。本児より能力的に低位なK児に対して、「私が連れて行ってあげる」という優越感が、「あまり話したことの無い先生の所へ行く」という抵抗をやわらげ、K児より本児がA先生とかかわり、お使いを成功させた。

② 事例Ⅱ —— 「負けず嫌い」な性格を利用して ——

能力的に本児と同程度のN児に、教官室のB先生へのお使いを頼んだが、N児は、「えー」と尻込みした。そこで、「じゃあ、Yちゃん、行ってくれるか?」と、本児に頼んだ。本児は「N児が出来ないことを私がする」という気持ちから、快く引き受け、お使いを成功させた。

以上のような成功事例を数多く重ねた。そして、2・3度、お使いを成功させた教師のところへは、ストレートにお使いを頼んでも、尻込みすることなく引き受け、お使いに行けるようになった。もちろん、短い伝言なら、伝えることも出来た。また、しばらくすると、その教師と同じ学級を担任している別の教師のところへも、お使いに行けるようになった。このようにして、本児がお使いに行ける（＝話すことが出来る）教師は、4月当初と比べて、かなり多くなった。しかし、伝言が長くなると、どんなに親しい先生のところへも行けないことが多い。

(2) 生活単元学習での指導

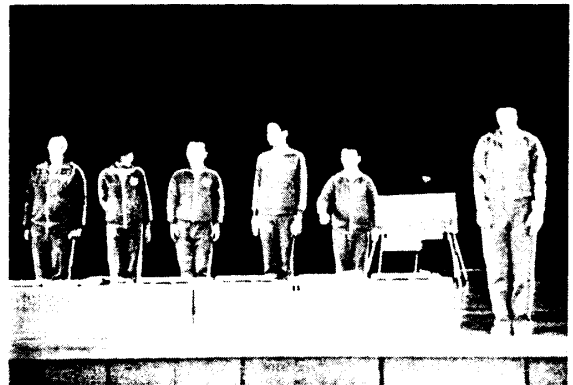
事例Ⅲ —— クラス発表へ向けた指導の事例 ——

児童生徒集会におけるクラス発表の内容を、次のように本児の得意な音楽的内容に決めた。

- | |
|--|
| ① 「～さん、～さん、どこでしょう」の音楽に続いて
「ここです、ここです、ここにいます」と歌い踊りながら、1人ずつステージに登場する。 |
| ② みんなが出そろったところで、学級委員（本児）のあいさつ
「これから、中学部A組の発表をします。礼!!」 |
| ③ 合奏 (ア)喜びの歌 (イ)荒城の月 |
| ④ おわりのあいさつ |

この発表の中で、本児が1人で話したり、歌ったりする場面は、①と②である。これらの場面では、過去の実態から見て、本児が緊張のため話せなくなってしまうことが予想されたので、事前に次のような指導、配慮をした。

- ・①の場面で歌う歌は、毎日、朝の会で欠かさず歌っている歌を選んだ。
- ・②の場面に関しては、「学級委員なんだから」と自覚を促した。
- ・合奏に対しては、ひとかけらの不安も残らぬようくり返し練習した。
- ・発表の3日前から、ステージ当日と全く同じ状況を設定し、何度も練習した。



当日のステージ発表場面

- ・練習の段階では、本児の声が一番大きかったので、みんなに「Yちゃんのように大きな声を出して歌おう」と話し続けた。

以上のような指導の結果、当日の発表では、少し顔を赤らめながらも、今までになく堂々と大きな声で号令をかけたり、歌を歌ったりできた。後で、たくさんの先生にほめてもらい、とてもうれしそうであった。

5 考察と反省

Y・Kが、「人前でも自然に話ができる」ようになることを目指して、実践を重ねてきた。その結果、ほんの少しずつではあるが、確実に目標に近づいているように思う。しかしながら、この研究を通じて、本児が出来るようになったことも、教師が意図的に整えた好条件の中で、初めて出来たことだと思う。教師の配慮なしに「人前でも自然に話ができる」までになるには、まだまだ継続した指導と手だてが必要であると言える。今後も、あらゆる手だてを施して、本児に「人前でも自然に話せた」という自信を与えていきたいと思う。そうすることで、真に、本児の個人目標実現に迫ることが出来るのだと信じる。また、長い伝言が言えない、自分の意見が言えない等、全く改善されなかった点多々ある。これらは、本児が知的能力に劣るため、難しい課題かもしれないが、あきらめずに指導していかなければならないと考える。

6 今後の課題

現状では、なんとか「人前でも話ができる」ということで精一杯であるので、今後は、少しでも、「自然に話ができる」よう指導していきたい。そのためには、やはり生活単元を中心に、国語の学習等をも含めて、広い視野で取り組みを継続していきたい。